麦林集　中

麦浪校

L913
ナ
2

麥林集巻三

穐部

初秋

秋しるや此は湯ニ草のもれかゝる

秋立や風は見しま出しかし汁

香久山ま手ぬるは何と網の秋

三重縣立圖書館 昭 12. 8. 2 12974

淒宵の荒吹消しくる節の秋

秋きぬと聞て見んする桐の一そふじ

絹くりや歳もその調子作

秋きぬと窓に見る見る夏古跡

七夕

月ハ入星ハ老しを年とる宵じ

明窓きけしめや星のなみ里く

星合や千歳の後ゆるへし
聟れその如膳やはしくら
あのゆきれあらうとおゑ女七夕
聟や三ッ四ッ二ッ橋うけよ
鉄負よ夜報うれしん女七夕
千鳥の丶舟さへ出けり星迠
打水よ数ハかしふ星乃恋
夜星も去よ逢頃や牛車

七夕にかしこく裸や弁婦人
立聖に一葉ふれさるとおもはく
能因も声清て骨引し謡の信
傾城のそれ見つく也こそ天河
七夕に名は余引し星合ふ
夕風や浮木も葉なき天河
立聖や秋河原の風多る
とれ聖に風も雲舟の渦へふ

星合や待ち惜しく明烏

天の河渡の舟も待し

星合の漢詩は秋や寺も詩も

星合や顔を隠して雲のきれ

魂祭

指折るに他人も今や魂祭

蓮池を懐にめうらしハ

茎の香を宮に運ふや魂祭
不拍子に迎へけり玉酒偏り
小車れ鳴やさしも玉まつり
空の記さしもかはし玉まつ李
国まつえぬこのいろし玉祭
麿の高小家からなり玉祭
幻筆れ好こもみつくしゆ祭
子規ハ二月もゆくしは是三月

秋と知る蜻蛉飛ぬる也　空に
物悲しき声なく思ひや玉ふ

八朔

八朔や行きの星をかしこ身
露ては酒の暑さぬいわりけり
有ねの情地れまされ候ふ

待宵

待宵に鍛ぬ行やあきなふ

まつ宵のひかりや翌日れ化粧を

行惜し月の名を帰と宵ありし

待宵りや立ゆくしる峯の行

名月

やうやく海越山を隠くるやりふれ月

名月や押合ながら六斎仏
浄土宗を白眼やまつりよるの月
秋出れ名行くえたふの月
雲裡のうへふきとまる月
名月や稲を落ても猫れよ
名月やいつとめ山を照とも
名月や濱名の名れ背負し
名月や菩まくみ行え法

名月や雨戸明れは鷹の掛かゝん
名ゝ月行月ハ濁さし一口
名月や桜の陰も惜まし
之妹孫にハ拾うんまてな月
秋之の様さへえくらゝな月
之理もりてハ深さ也て月見んハ
下まれ濃外も文よしりてな月
名月や又く御浪の名れ歌

名月や芋堀坊も僧一句も
名月や年貢頼負に家根
夕ふの月かゝりきれ二階から
能里来の陰ハ船へしくふ月
名月や岩戸の空も面白し
秋まつね蔵ハさしきも月見から
去明りまよハまるやまるの月
芋喰りてこそ細へと月見から

○麥中

名月やかす細に人かうす

水晶に芊流るゝや月の露

名月や雲彩もれ御庭もれ

錦然村にて

翌日の秋ハ又を山や里の月

病中作

名月や起く添る秋名の山

病後作

六

名月や家ハ七歩の床てらし

蓮臺寺の里に於て

月のくれ苅てや子猫此一畝所

十六秋

十六秋や家出の手向し人ニ照

十六秋や川水の呂れ落ハ暗

りよハ又二八ミえんの月見ゑし

十六 秋の暮の句やかれ枝

底

底の意れ底如此ハ深き遠し
底れ多き心を角ハあまりし
底の多き作れ半も角ハあかし
并わびハ底ぶの意や秋の底
第一異の底も尽し底の意

庵の菊やけしく花よ中よ
花よりや庵の主ハ大河
風の手れ引のたより菊の香
此時れ角ハ菊とや庵の長寿
冬枯れ折りさりしや庵の花
庵の菊や東山よれ形も花のそて

重陽

八

（）番中

菊ににほふ香も類希やたくふの菊
八重葉もうふ九日れ句しりれ
来る人の匂ひに香や菊のりふ
殊しく者見れしも菊れ山路に
菊綱へ持ち見く見れ代りれ
作と入八見れ代よも有菊白圓
後る心も襟に恋しうきし違
孫宿以

（八）

菊の日は廿夜と拘り稲の塵

病後作

菊は日の見エ置過りや、天宗

十三夜

遊人は稲照月や大盃島

地も山も但之嶺く梅は月

詩歌よも不玉えく玉魚月

豆からハ木に倚りよせ月見に

題山

湖子田をかゝへし照や下之秋

題海

龍宮の姫ハ浅つそ下之夜

閑居

菜一把他の蒲葉や採ル月

穐 以下不分題

物情なき人住ミしも里乃夢
初風や一葉うちそよく文月の空
世の中に論ハなし十七枝
ともしに眼わくらかたより衣

題 不知読

こゝれまえて風の女郎花
秋も深き眼残りて思ひけれ
入相よ何くれなれ不穏ぐ

途中吟

時有し人来しあともしなくなれ也
置横に風の横緘ぶ雌ぶ
暑さなれ時俗さき巷地名紅
朝良や来のあと八日さむさ

月渓律庵を訪ふ

菴の須らなり行灯

住居を訪ふ

菴に野ん住居眼キやう

蓮臺寺游詣

蓮の実もこほれておちや流の音

まくくれ落のきひとみにひと

蓮の間をさくりうちよる　静かれ

○變

多き布袋のやしに口しめ系多
鍛の多れなへ隔しく火燵ぶ
久白も珍仕来に野らぬ
一両京野におまさり角力など
浪人傍のぬけなや川の端
多てやりの世より此話など
萬好々花は何ぶの稲れを
女目印を野藺の多れ立せし

落穂拾ふ後ゟ夕日に亂れ飛

往く〳〵子も傾ぐや稲の中

訪ね年に孫なき負の案山子じ

秋けく〳〵雨衣の案山子亂

高ゟ綱に張ゑハ隠〳〵案山子じ

鳴子引き己ゟ登ゟ採子静ゟきね

きも猟に子顧れゑ〳〵けゑ草れむ

新無山嶽子〳〵

山深く茶よも白やまぶれも
紫蘇の葉を体ぞ女一日中ハ
放生會
山雀や飛まはく身をく杉を寄
葉月の家郷もかはらし男ハ
一ノ浪乎傳え居く
瑞ゐの精のりぬと見えゐハ
湖れの薬を流うへしく薬ハ

竹川の瀬まゐもなし村紅葉

猪れ田丈に荒れ紅葉の乱

何某か庭に紅葉を植られハ

朱の紅葉ハ冬をとゝくや霜紅葉

菩提山にて

林間に仁王も頬あかくもみちふ

紅葉かし樹にもや菩提山

溪そのみも洗ひ流に猿ヶ神

古戦場にて

殺されし石も立より寄るうつゝ

蛤の木より桜に風へ落るか津

風来子山中にて

赤の気に蘆出るや秋の水

一ノ瀬にて

一の瀬もとハ浅瀬え秋は哉

加賀山中温泉にて

仙人にあらぬ湯入の野れも哉
見へぬ顔簾もをし影絵哉

初秋吟

寂しさは門に入かゝる三ケの月

文月六日吟

翌日は何待顔の星のふや置れ記

題米守

百ハ傍さすゑ雀やおとし哉

○發句

山田氏何某のもとにて

茶の花にまさるや尼院の垣ね

深泊の雅子に聞まく

書皇の羽根も休めん濱かな

一ノ瀬にやりく

義範の一枝肥えりよの浪

稱行院に於れく

永ハ此頃に紫し　李仙筆

阪氏に勝らしく

錦の裳に織れなるのみちかる

児童は嬉しく

蛸帰れ眼の淋さに旅住邑

午潮に移れしく

世れ多れ無隣ハ二日し菊の花

薬ニ店よ帰しく

秋言しまも風を知る宿れ白ればら

高士こゝに瑕もなく
菓子盆に秋と云ふ風もなし
形見こゝろよく
生ゝつくる葉に又皆秋の味
と聞こゆ
草積夜一同く此句にうれし
尾張の宮中に若しく
その国も名も隣や友なるらう

かれ百化氏に伏て休く
此ハ漂さ志て收て屏風のみそふ乱
一蓑庵より
言阿とふ蕾も化かれ、唐の娜
百化氏のお壁より
秋涼しのよ縮の白れの太かり
丘桃法師の菜を縮しよ
この菜にも秋客らやかりん秋のれ

○移吟

坂氏より

秋うし〳〵萩すゝきあつしぐ

山田氏の花壁よし〳〵

秋ハあれ倖咲よ皆〳〵萩渓山

江君の何系に論ずる〳〵

後端よ堅田の序や二尺と

李伯文志よけ別し〳〵

まよ綸をあつく塩れ句れや其處辰張

此の上曲に詠出し

貴皇の筆いとしきや旅すゝき

東武自国に居りし

日尽のうへとのこと筆のを

信君連化り俳諧の生質を称し

あみりき八日の筆の白にて

畔古こそよし

自讃の画の一首や楓硯

李似の句は芦花にまぎれし〳〵

落も捨し人も捨るや芦の花

出雲よりほとゝへ来一畑に

参り世にあそびをよし〳〵

かゝる〇あら気のりゝや秋の山

氷見の雅刀を破れ吾仙見と

袖よし〳〵文の月に幸也

れるに旅を厭く

貝に照る磯の月と二見かな

九操ゆすまく

常盤木も律の拍子や雨の庭

未黄ゆゝみく

折もし照にむ人ハ子もち餅

一号寒亦ゝ原のかり藤に讀ん吟会

の主也ゝ申しも叶草月のはなり

りりとしハ荻秋法師とつさるれ

くゑれ附ゝ序れ奥と行りよ

図

○秋中

蛉の羽にはさまりし袖傳ひ

并木永言流にて

篝はきえて有けり梅か枝

右極まりまして

初雁の音と云る孫枝あり

秋風や急ぎ捨ゆる紙見

何れまゐりまして

拾ひしく落も拾ひや庭の秋

一

か度氏のかくわろくなり衣皆

そこに名をえ於ける中の秋に

稲干にしける白くもいと

同き取りけるしハ稲まふらはる

よかるへし

悪の名にハわろく候てよし

ハすの葉は且ちり乃助り

よ孫あまさき見候とみへく

立居にもかくえ候ま庭乃菓

横便氏秋法師ハ九十方院

○夢ノ中

の名とうたしく萩原の里に
なよ竹を始め一族の是を信る
もろこしの人これ助かまじきや
されは圓位上人れせの中
をいふを含せんといはれし
も今しは秋のかなる

いうけや数えのとてもこしくし　艸菜
跡の花まの俳名わするゝなとて
ゆきく

名かゝりの杖もあやめ草の酒

涼しさは賤か鳴ても秋哉草

このいまや女人様よこり秋の草

秋の草てれにしり漕ぐ横乃舟

はよう月や秋は扇に家せられ

不雀の名に若しく

小雀の花よりゆける猫は表口

暮秋

ゆく秋の道々古田をみるつくし
惜くりて来く惜うゆく秋ぞ
ゆく秋や馴染ぬ名も又ことのせ
ゆく秋の尾をとらへてや暮かゝる
中々好の惜詠く絶てぬしらず
深積れ心はかさく秋暮暮
やりく鏡晴つし折りへつし秋の暮

秋の暮猜頃の嵩もゆけくれ

九年母ハ彪もゑろし秋暮如

九月晦日雨降尓ハ

頃ま暮まてや雨如神送

麥林集巻四

冬之部

十夜

小坊主も伯父に参る十夜かな

祖父祖母の京にも多き十夜かな

歸てはい立往生の十夜かな

蓮池ハ根でねあし十秋ヶ花
京唐臣も初声して万ず十夜ぶ
蓑ハ三升売〳〵十秋の頭帽子

時雨

主計の清夕空ん初しく此
牛の子も白黒書きふく〳〵時雨ぶ
扨そろしき雲も仏やゝ初海西

飛は寒れ何く雅も初しくれ

木兎の聲やうしろに時雨かな

神鳴りかふく待りし時雨かな

松小家の續さしは何ゝ初しくれ

峡纏くうちは身なぞ雨あし

傳は溺れさへの音山や初時雨

瓢箪の影も寒るや初しくれ

窓竹く双紙後やえん時雨

〇蒼虬

千鳥

往舟の讀もまぎらゝちどり哉

吹れやよるも川の夜ちどり哉

鳴ぞ夏なく白鳥にあかれ鳴けり

里の秋れ梨地に啼や村よる

小信まく

立ちてハ又行かぬ川よる

雪

初雪や酒と孫よぬ数ちらし

霜の雪比きくこや人動の雪

昔は、ハ草の露やと氣比雪

風のまん敵子果ほや赤の雪

天溪よく

雪つんよれし帆やまかせ里り初ゝ嶽

霜月末小町し侍の汐干狩にて
かゝる海髪や汐干のなごりきぬ
月影に乾くかゝし　標注
出るく波は波の汐干かな
焼きては火縄へかゝる汐干哉
霜所く月の漁村に汐干かな

臘八

猫ハやハ床の菊もいとまなし
猫ハやハ梅も眼比らき初
埋火や暁きハ黒なりつ
猫ハやハ雪書ともなき磨墨
猫ハや猫の夜遊ハ時知らぬ

冬之　以下不分題

木兎の目たゝきしけし落葉哉　似

耻らしれ雲にちりぬる落葉哉　凡

梢にハうすく残りし落葉哉　巧

木枯や落葉ハ書さん家　表雪

かへりふる日の鐘にきこえし　松

秋風を吹よりし跡しく帰花

浪花に湿氣ハ例し懐手
又人語に下三来や大根引
縁よりに柳さよを大根引
十方に里れ道あり大根ゑき
春夜前や一眠ハ又向ふ風
夏蕨ハ母もとり繊きれ
枯芦に出や新しく池の鴨
達三戸や掃子にさする蝿も急

はさ〳〵に稲ハ折〳〵枯野かれし
のけ〳〵背火燵にかゝる夕扇おぶる
うかれ女にたえ老まかれ火燵かな
むらさきの鳥を待つや水仙花
ふところを猪よし〳〵切ますけ
蛇の抜がらの月秋の烟代守
粥腹もきは〳〵むし〳〵法さき
水鳥の嘴振るや弁生寄

みなの玉ぬかるきかれなれ
木のくしのやうに折りへてま雨風にさ
らぬ種さ猾に清くや志め胴
桃よもなりぬ玉磨やみえ白龍
法思ス強之仏ありみえ古より
吟がけりも濱の真砂やみえ白龍
言の葉いふ号を最しくりよけり
笑の尾の御きやみえぬらし

○夢中

寄月白気を題に探く

白気や一項静く河岸中し

まふる夜上戸も吹峯系ろ舟し

冬の月白し豆腐に梅の花

冬れ秋の果や落ろん梅乃ふ

山寺にしく

仮庵に咲分ぬり冬れ梅

冬枯と承り名ふ冬木梅

病後吟

起直りたる程もなし冬の風

寺住の落葉

落葉しくしく又觀音が掃除　哉

題　修羅

水仙よ可も可し葉ハまつすく成

畜生

鷄の忘れてハ鳴ク霜夜　乃月

東道か新宅を祝して

宗よまて尾鰭の付や恵須講

こゝ移女に祝して

水仙やそのよさりける月の影　梨素

讀よも四やうぬ新や今　杜舟

秋丈か入庵の時

世北件のかこり硯事　蔭叔

東葉かさより年の暮に

百は隠尾にしらぬ身のうさけれど
うなしるゝし

打ちしれ尾にとる百もかゝりきり
高の翻宗人を得く

家わゝ給我と所形や一寄れ翻
兎士まりにく

色ゝ義孫一福然し　あわれ
越の人にあしく

笠れ名の細代も定めし五十鈴川

何条の鴨と柄とぞ思ひけれよ

鴨の羽ぞ惜しく乗りやるの樽

葉名可きれ請りし時

浦ふとりともの山も見へくく

し多こゝまて抓るふしく

気屋に乾く時間のやとりのれ

五条坊之運ころまく

白髪にならん拝借なり初しくれ
桂窓氏に抜られしく
蕉翁の志あり加減やまた時雨
越の至朋に時雨吟を綴られしく
時雨抄といふ名甲斐ありし二つ人まで
さしめくく善悪の宗匠を論ひ
くりかう蕉翁へよるぞ世の人なる
篇章に見劣しきるもなし

恒主衣や気のつく人まは冬牡丹

見龍ヵ土産を贈りし时

茶つけしてくれし庵の若葉かな

狐の白拍子と云菓下といふ紙

茶碗に香包るゝ慈照寺の

男女物えるはさと侍やく

小原女に化粧ハ負し　孤芳　一雪

歳暮

瓢箪のうきふなき師走かな

麦飯に居とうつしく

喜侭は富にましし年の暮

年の尾にあらむありしや　宗藪

根深一把晴よしてまだ忘れまじ艸
夕顔の夜よハ何昼として九市
宮とてもあれ隠れよも有年の市

四季庵のまゝ忘ま

春夏秋　こゝろ面白しでまた忘
年忘れ忘れ不魂に縁と帰をりく
縁帰や兎も角も華の枝
歳暮探火縫の山にとし　い蔵

病後吟

春一張蔵あるをもやとし此夜
賊来りしく居やむ家の衣服
みな奪の怪偸ニ掠ふし
保むまよし雌ぞ怪夜二階され
あさしききとよりまの室ニ
濃けよむし大黒取ゆとゆらん
にうしききくのこゑとあとねく
世の為ぞ空ぬも嬉し此取中

候ハ将のあそひ也とて戸 かつぎ
米の飯といふ文字を下に置く
豆腐やかまくら菜ましなる 米の飯
いしの朝熊の嶽乃茶屋かな
此句ハ句合とやらに出されハ
永数七百の行為やらし 出来市
国中此師匠も文永雀の御
みしれ屋も忘れて礼やらん庭さき

梅さくや條ハ方角のうつハこさ見
大晦の日なきとおもふや條掛し
寸梅やかゝるも凍し萩也仲
梅か香や師走の空も力あり
酒もなく條も梅花
きこれよう外しく去を待のこ　行
頃来ぬや私梅麿さし　云
一ま儀房も婦かくし　佐羽

○冬中冬

L913
N
2

年内立春

梅か香に一葉切ルやみし農うち

佐保姫の若いに扇かりし手の内

君風呂に春を済しや年の内

うれうちに白の光や梅の花

きうりや若れは機に冬ち紙

巻も一冊読かりみしけるち

099
[illegible]
2

三重県立図書館
140018136